

月刊

2014

9  
月号

# みんぱく

特集

# コ コ ラ ボ の カ

新美術館×みんぱく 長屋光枝 山田由佳子 上羽陽子 齋藤玲子 山中由里子  
千家十職×みんぱく 八杉佳穂  
狂言×オペラ 小宮正安



# 異文化適応能力と女性

サントリー文化財団に研究フェローという制度があつて、その人たちの研究発表会で若い女性人類学者の話を知ることがある。インドの田舎に古い被差別民の暮らす村があるのだが、彼女はそ

の中でもさらに差別される女性に混じって、長らく体験調査をおこなつたのだという。その勇気そのものが私には驚異だったが、彼女の淡々とした冷静そのものの話しぶりには圧倒された。被差別の極致にある人々と同じ生活を体験し、発表するのでも慨嘆するのでもなく、客観的な科学的観察に徹するというのはたゞごとではない。

思い出したのは、すでに有名人だが、アフリカの民族楽器ニアティを習得し、これを世界に広めた日本人女性アニャンゴさんである。ニアティはアフリカでもすでに忘れかけられていた弦楽器で、極端に前近代的な一少数部族の男性にのみ継承される音楽であつた。彼女は単身、その男性優位の村に移り住み、水くみを含む女性の苦しい義務に従いながら、数年がかりで族長に訴え、ついに禁断の楽器の演奏を習うことを許された。

たちまち彼女の技量は村の男を凌ぎ、族長からアニャンゴという現地名を与えられて、今ではニアティを世界中で紹介する活動をおこなつている。現在の彼女には、この楽器は誇るべき自分

の文化であり、族長は敬うべき師匠として見えて

いることだろう。随想だから論証抜きに言うのだが、異文化に対するこのような尊敬の姿勢は、とりわけ女性に顕著に見られるような気がしてならない。異文化を近代化の物差しで計らず、現状の異質性をとりあえずそのままに受け入れようという態度である。一時的であれ、異文化の価値観それ自体を受容するのだから、その生活様式への適応の努力は強まり、能力もおのずから高まるのが当然だろう。

そういえばアジアに単身で赴き、現地で起業する人にも女性が多く、その業種も現地の伝統産業を成長させたものが広く見られるという。冗談めくが、テレビの長寿番組「世界ふしぎ発見」でも派遣されるミステリー・ハンターの多くは女性である。

歴史を振り返ると、世界中で男性よりも女性のほうが、異文化に適応する機会は圧倒的に多かった。女性は身分が高いほど外交の具に使われ、政治結婚のかたちで異国に嫁ぐことが少なくなかった。その経験が目に見えぬ遺伝子となつて体内に残り、文化的な柔軟さと強靱さを生んでいる……などという妄想を抱かされるほど女性は強いのである。

## 山崎 正和

プロフィール  
1934年京都府生まれ。劇作家、評論家。京都大学文学部卒業。関西大学教授。大阪大学教授、東亜大学学長、サントリー文化財団副理事長、中央教育審議会会長等を歴任。戯曲作品に『世阿弥』（新潮文庫）『オイティウス昇天』（福武書店）など。著書に『劇的な日本人』（新潮社）『陽外 闘う家長』（新潮文庫）『柔らかな個人主義の誕生』（中公文庫）『紫綬姿章、文化功労者、日本芸術院賞を受賞』

- 14 文化遺産ももてうら  
翻弄された地方劇——中国の秦腔  
清水 拓野
- 16 多文化をあきなう  
貴重な植生と限界地の暮らしを守る  
ルイボス茶のフェアトレード  
池上 甲一
- 18 味の根っこ  
ミサル  
松尾 瑞穂
- 20 人間学のキーワード  
インクルーシブデザイン  
平井 康之
- 21 異聞逸聞  
新時代のタブラ  
ディアナ・ニコディノブスカ
- 22 制服の世界、世界の制服  
宇宙服——宇宙飛行士の制服  
和田 理男
- 24 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
異文化適応能力と女性  
山崎 正和
- 2 特集  
コラボの力
- 2 新美術館×みんなぱく  
——座談会「イメージの力」展ができるまで  
長屋 光枝、山田 由佳子  
上羽 陽子、齋藤 玲子、山中 由里子
- 4 千家十職×みんなぱく  
——創造を生みだす刺激と美を追求した展示  
八杉 佳穂
- 7 狂言×オペラ  
——ジャンルの枠を打ち破る  
小宮 正安
- 10 集めてみました世界の〇〇  
弁当箱編  
杉本 良男
- 12 みんなぱく Information

月刊  
みんなぱく  
9月号目次

## コラボ①

### 新美術館 × みんな

— 座談会「イメージの力」展ができるまで

「イメージの力——国立民族学博物館  
コレクションにさぐる」が、九月二日  
にみんなばぐで開幕する。東京の国立新  
美術館で二月から六月まで公開され  
注目を集めた同展は、新美術館とみんな  
ばぐのコラボレーションの賜物<sup>たまもの</sup>。

山中 本日は、「イメージの力」展の実行委員を  
つとめる、国立新美術館の学芸課とみんなばぐの研  
究部のみなさんにお集まりいただきました。ビデ  
オチャット形式の座談会という新しい試みを通し  
て、美術館と博物館のコラボレーションについて

意見を交わしていきたいと思います。二〇一四年  
二月号でも関連の特集を組みましたが、そのとき  
は展覧会の背景にある理念や文化人類学的な議  
論が中心でした。今回は展示の準備や公開期間  
中のエピソードや、おたがいが感じたことなどをご  
紹介できればと思っています。実行委員全員が  
集まらなかったため、女子会のようになってしま  
いました(笑)。  
みなさんは、構想から展示作業、そして会期  
中の広報やイベントというすべての過程にこの二  
年間かかわって、苦楽をともにしてきたメンバー  
ですが、共同作業のなかで、たがいの違いに驚か  
れたことも少なくないと思います。まずは、展示  
ができるプロセスのなかで、印象に残っているの  
はどういうことでしょうか。

## 破格の人数

長屋 まず初体験だったのが、「実行委員会」と  
いう組織です。新美術館の展覧会では担当の  
学芸員がいろいろ考えて、副担当の意見も取り入  
れながら準備を進めてゆくの、担当者の権  
限と責任が強いんです。みんなばぐ式の「実行委  
員会」はわたしたちからすると破格の人数で組  
織されていました。複数の実行委員の意見を集  
約して展覧会を企画するということが自体がわた  
しにとっては新鮮でした。

山中 新美術館とみんなばぐ、それに今回は日本  
文化人類学会創設五〇周年の記念展示でもある  
ので、学会から外部の先生方にも関わっていた  
だけ、計一四名で実行委員会を何度も開いて、議  
論しながら構想を練り、展示物もみなで選んでい

国立民族学博物館創設40周年記念  
日本文化人類学会50周年記念

## イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる

イメージの創造とその享受のあり方に、人類共通の普遍性はあるのか。この壮  
大な問いをテーマに掲げ、みんなばぐの膨大なコレクションより、仮面や神像から、  
今活躍中の美術家の作品まで、世界のさまざまな地域で生み出された造形物  
を選びすぐり紹介する。みんなばぐと国立新美術館の共同企画。

東京 国立新美術館  
会期 2014年2月19日(水)  
→3月9日(月)

大阪 国立民族学博物館  
会期 2014年9月11日(木)  
→12月9日(火)



長屋 光枝  
国立新美術館主任研究員  
山田 由佳子  
国立新美術館研究員  
上羽 陽子  
民博文化資源研究センター  
山中 由里子  
民博 民族文化研究部  
齋藤 玲子  
民博 民族文化研究部



国立新美術館で開催された「イメージの力」展のプロローグ。  
来館者を出迎えるのは仮面から放たれる複数の視線(撮影・上野則宏)

コラボレーションとは、作法も語彙も違う異分野  
同士が、違和感を覚えながらも、互いに刺激を  
与えあって進める協同作業。その先には、既存の  
枠組みにとらわれない、新しい創造物がある。

## コラボ②

# 千家十職 × みんなぱく

——創造を生みだす刺激と美を追求した展示

八杉佳穂 やすぎ よしほ 民博 民族文化研究所

### 民族資料が放つ魅力

みんなぱくには、さまざまな地域に住む人びとが日常使っているものを中心に、儀式に使うものや土産物など、人間が生活のために作り出したものがほほ何でもそろっている。ほとんどが手作りのものである。展示場では、その一部が出ているだけで、残りは収蔵庫に眠っている。

民族資料は学問のためだけにあるようにならずと思ってきたが、学問のためだけに使われる必要はない。というのも、なかには薄汚れていて、汚いと思ってしまうものもあるが、どんなものも何かとても魅力があるものばかりだからである。人間の情念が発露しているのか、単に美とよぶだけではその魅力は言い尽くせない。そんななまやさしいものではない。人の心、魂を揺さぶる何かがある。それをなんと言ったらいいのか。いろいろ考えた末に思い浮かんだのが、根源美であった。

創造心を刺激してやまないそんな美をどのように表現していけばよいのであろう。

収蔵品をさまざまな人に役立てるには、これらの資料に刺激を受けて何かを作り出す人を巻き込んで展示会をしたらおもしろそうだ。収蔵庫に眠る品々をみて、そこから受ける刺激でものを作ると同時に、自分が気に入ったものを選んで展示する。そうすると、収蔵品の利用範囲が広がるだろうし、文化の境界を越えて共通する美や形が存在することもわかるであろう。地域ごとに展示している手法とは別の切り口が与えられるかもしれない。

### 刺激から創造へ

そんな思いから企画したのが、二〇〇九年に催した「千家十職×みんなぱく」であった。京都の茶道具を作る千家十職の皆さんにお願いすることにしたのは、茶道具を十数代にわたってつくり続けてきた十家が、芸術家的な人から職人気質の人までバラエティに富んでいたからである。さらに四〇〇年あまり続いたお家の人であり、それぞれがお茶を通して独特の美意識を培ってきた人に違いないと思っただけである。

特別展示場の一階では、十家の代々が作り出してきたものを利用して各家の説明をしたのち、各家当代がみんなぱくのものをみて作り出した作品と、彼らを選んだ資料を並べた。それによりみんなぱくのものが、創造を生み出す刺激となり、美を通して文化的な展示ができた。二階では、「叩く」「描く」「縫う」などの手の動きをあらわす「一個の動詞

くという作業になりました。  
長屋 これまでは少数でつくるのが良い展示会への近道だと思っていました。でも実行委員会での議論を交わしてみると、一人では思いつかないようなアイデアもでてきたりして、参考になることも少なくありませんでした。

山中 実行委員会では、展示の大前提となる「イメージ」ということばの理解から議論をはじめたわけですが、すでにその段階で美術館と博物館・文化人類学者とのあいだで微妙なズレが生じてい



みんなぱくでの実行委員会の打ち合わせ。収蔵庫で選んだ候補資料の写真を、展示場の平面図に並べていく(撮影・齋藤玲子)

ました。  
長屋 「イメージ」ということは自体が難しいですよ。日常会話で使われる場合、哲学用語としての場合など、それぞれのケースで意味が微妙に異なることばだと思います。美術館の間には、頭のなかに描かれるイメージというよりは、目に見える表象物としてのイメージを想定しているで、その辺で噛み合わないと思うところがあるはじめはありました。

上羽 「イメージ」のほかにも、ことばの使い方についてやりとりがありましたね。みんなぱくでは展示物のことを「作品」とよばずに「標本資料」とよぶとか。みなさんのことばの扱い方が整っていきにつれて、展示の章立ても徐々にまとまっていったという印象があります。

長屋 美術館のなかだけにいると基本的にはみなさん同じようなトレーニングをしてきた、同じように仕事をしてきた人と話しているの、食い違いはない。バックグラウンドの異なる人たちとこんなに議論したのははじめてかもしれません。  
上羽 我々も展示とは一体なんだろうとか、人にモノを見せるとはなんだろうという基本的なところをあらためて考える機会になりました。普段あたりまえのように使っている用語が全然通用しないということをすごく実感しましたね。

### 収蔵庫という迷宮

山中 ある程度コンセプトがかたまってきた段階で、みなで収蔵庫に入って展示物の選定がはじまりました。収蔵庫体験について印象に残ったことは？

途中で特定の作品が作られたかという研究は盛んですけど、わたしたちは作家と作品の関係、あるいは見る人と作品の関係など、「個と個」の関係性で作品をみていくことが多いです。今回の展示会は、それとは違うスケールの時間や集団で、造形物と人間とのかかわりというのを考える貴重な機会でした。

### 作法の違い、視点の違い

山中 まさに、ツボを押えてくださいました！

それでは、具体的な展示手法に移りたいと思います。例えばキャプション(説明文)の作り方をとつても、記載する情報やフォーマットがずいぶん違うよう見受けられました。

長屋 みんなぱくのキャプションでまず不思議だと思ったのが、「何年収集」と収集年を書くことです。美術館では制作年を記します。あやふやな場合は、推定とことわることはありますが。だから「収集年」というのに随分抵抗感がありました。

齋藤 博物館のコレクションに収集されたのが、戦時中なのか戦後なのかなど、学問的にどういう時代を集められたのかというのは、制作年と同じくらいに意味をもつ場合があるんですよ。

上羽 たとえば布の場合、おばあちゃんの着物がじつはひいおばあちゃんから受け継がれたものであったりして、製作年代を推定するのがそう簡単ではないのです。もちろん文様や技法で製作年代を推測することはできるんですが、いちばん学術的に正確な情報となると、今そこにモノがあったという証拠である収集年になります。そういう意味でみんなぱくは収集年というものに重きを

山中 とにかくすごい数の、いろいろなモノがあるのに圧倒されました。でも何回か入って見させていただくうちに、これはいいなと思えるもの、自分の感性に引かれるものがだんだん見えてきて、それが面白かった。「これが名品だから」というような先入観なくモノを見ることができたのが良かったのかもしれない。

長屋 資料はみんなぱくに受入れられた順に並んでいるので、地域ごと、用途ごとに配置されているわけではないですよ。あの収蔵庫を全部把握されている情報企画課の飯島さんは、頭のなかに三四万点があるって感じですよ。いなあと思いましたが、わたしなんてもう、自分がどこにいるのかもわからなくなっていました。

じつは去年の秋に展示準備のためみんなぱくに行ったとき、一日じゅう収蔵庫にもって作業をしたのですが、夜に熱が出てしまいました(笑)。なにか迷宮に入ったような、あの混沌とした雰囲気にも多分やられちゃったんでしょう。

山中 日常、美術品に接しておられるわけですが、そういう体験はなかったのですか？

長屋 美術館で扱う美術品は作家性があって、作家個人の執念みたいなものを感じることはもちろんあるのですが、みんなぱくのものには不特定多数の人が、代々受け継いで使っていたりするので、そのあたりが美術作品と違う。膨大な数の人がかかわっているわけで、美術作品とは別の次元の重みを感じられましたね。

齋藤 かかわってきた人数ばかりでなく、時間の重みもあると思います。

長屋 もちろん美術史でも社会的にどういう用

置いているんです。

山中 展示準備を進めるなかで少し違和感を覚えたのは、みんなくでは展覧会企画の初期の段階から展示デザイナーにノウハウももらって、彼らとともに展示空間を作っていくんですが、新美術館では学芸員の方々が図面も引いて配置まで決めるという。びっくりしました。

山田 正確な寸法をだしたり、支持具を作ってもらったりすることは自分たちでは無理なので展示業者に委託しますが、基本的にレイアウト図面は学芸員が作ります。

山中 今回は形も大きさも、置き方も違うものが多かったの、相当苦労されたのではないですか？

長屋 そうですね。わたしの場合、基本的には絵画の展覧会が中心でこんな大規模に立体物をやったのは初めてでした。それでもレイアウト図面を引くのは一番楽しい仕事でもあるので、デザイナーさんに全部任せてしまふのは非常にもったいないことだと思います。

山中 展示空間での、モノとモノの距離についても、みんなくでは展示物を詰め込んで、できるだけたくさん見せようという傾向が強いですが、美術館だと通常は作品と作品のあいだにかなりゆとりと距離がありますよね。

長屋 確かに通常の美術展よりも展示品は多かったですよ。でも新美術館は天井が高いので、それほど窮屈にも見えなかったのではないのでしょうか。ポイントとなるものを一点だけ象徴的に配置したりするなど、もう少しドラマチックにすることもできたかもしれませんが、今回はフラット

### コラボ③

## 狂言 × オペラ

### ジャンルを打ち破る

小宮 正安 こみや まさやす  
横浜国立大学准教授



狂言風オペラ「ドン・ジョヴァンニ」初演のようす。2014年4月25日大阪のいずみホールにて(提供・ヴォイスンク)

### お豆腐狂言

「これは何をやっているところでしょう?」。クイズのひとつも出されようという光景だ。伝統的な装束をまとった狂言師の向こう側には、燕尾服に身を固めたクラシック音楽の演奏家が座っている。彼らの横には、羽織袴姿の鼓奏者も見える。



遠くまで見渡せるレイアウト。国立新美術館にて(撮影・上野則宏)

に見せるという方向でうまくいったのではないのでしょうか。

あと、レイアウトを決めるとき、ひとつ大きなポイントになったのが、「全部見渡せるように」という青木保館長(国立新美術館)の意見でした。これまで新美術館では迷路みたいに部屋を巡っていくような展示レイアウトが多くて、遠くまで見渡せる展示は珍しいんです。

山中 出来上がった広い展示空間を見て、モノた

ちが伸び伸びとしていて、楽しそうで心地よさそうで、なんだかもうみんなくには帰ってこないかも、そういうふうに見えました。

齋藤 民族資料を扱う場合、展示物の置き方も文化的な配慮を働かせなくてはいけない、つまり作った、あるいは使用していた人びとの意図に反するような置き方をしてはいけないという倫理観を背負うことになるのですが、そのあたりいかがでしたか？

長屋 今のわたしたちがどういう視点でいるかということも明確にしたうえで、作者の意図とは異なる解釈をするということが美術館では可能



国立新美術館の展示場にて、一部の資料の前の床に引かれていたグレーのライン(撮影・上野則宏)

を選んで、それぞれの家の仕事をふたつの動詞で代表させて、十職の仕事が少しずつ重なり合いながらつながりあっていることや、同じような手の動きでさまざまなものが生み出されることをみんなくのもので示した。みんなくの収蔵品ばかりでなく十家の仕事も、いずれも手仕事である。両者が、手の動きをあらわす動詞を通して、掛け合うように考えたものであった。

「千家十職×みんなく」展がみんなくや社会に与えた影響はどんなものだったかわたしにはわからない。しかし、みんなくのもつもの魅力を伝えようとした試みが、「イメージの力」という展示に結実したことは間違いなと信じてたい。



「千家十職×みんなく」展のようす(「千家十職の目と手」展示部分)

なんですよね。今しか見えない視点を引き出すというのも美術館の展示のひとつの手法なので。その辺が決定的に違うなと思いました。

山田 そうですね。それから、美術館的な視点では、まずは作品そのものと対峙することが重要なので、章立てのテーマ設定に照らし合わせながら、展示するモノの視覚的な特徴を重視して出品するかどうかを決めることが多いです。文化人類学の分野では、どの地域も平等に扱うという視点が重要であり、そうした倫理観を作品選定のときにも強く実感させられました。

### モノとの距離感

山中 展示ができてからの話に移ろうと思えます。

お客さんとモノとの距離感が、美術館と博物館では違うんだな、ということをおぼろげに感じました。展示物の前の床に「これ以上は入らないでください」という意味のラインが引かれていました。美術作品の展示では、あのグレーのラインがきちんと認識されていて、ある程度距離感をもって作品と人が対峙するんじゃないかと、今回の展覧会に行った方から「ラインを越えて怒られなかった」という感想をちらほら聞きました(笑)。長屋 ラインは美術館の習慣としてあるんです。それにお借りした資料を無事故でお返しするのが大前提なので、そこはナーバスにならざるを得ないです。でも、道具だったり祈りの対象だったりするみんなくのモノにみなさん吸い寄せられるように近づきたがるというのは、博物館の資料がもっている力だと思えます。

じつはこの写真、「狂言風オペラ」なるプロジェクトを撮影したもの。モーツアルトのオペラと狂言を融合させようというコンセプトのもと、二〇〇二年に始まった。狂言方には京都の茂山一門を迎え、音楽はドイツのブレーメンに本拠地を置くドイツ・カンマーフィルハーモニーのアンサンブル、さらに洋の音に和の色合いを添えるべく鼓が加わる。

筆者がこのプロジェクトに脚本家として加わったのは、二作目の初演がおこなわれた二〇〇六年からで、そのときは「フィガロの結婚」だった。それ以来、「魔笛」、「ドン・ジョヴァンニ」と続き、日本国内での再演はもとより、ドイツでも公演がおこなわれている。それにしても、なぜこのような突飛なアイディアが生まれたのか？ 鍵を握っているのが、茂山一門だ。第二次世界大戦後、狂言界の不振が続くなか、彼らはどのようなシチュエーションにおいても柔軟に舞台をつとめる「お豆腐狂言」を掲げ、従来の伝統芸能の枠組みにとらわれない活動を展開してきた。

思い切り遊ばばいい  
というわけで、狂言風オペラも茂山一門の積極的な協力を得ることとなったのだが、打ち合わせの際に驚かされた。「オペラだから、狂言だから」として構えるのではなく、それぞれのジャンルの枠を打ち破り、ふたつの世界が融合するような脚本を書いてほしい」と告げられたからである。コラボレーションという、異なるものを並列的に並べて、はいおしまいとなる場合が多いのだが、それでは

ダメですよということ。  
その意味は、本番に向けて全員のリハーサルが始まるとますますはつきりする。来日したドイツ・カンマーフィルハーモニーのメンバーからも、「演奏するだけでなく、演奏以外の場面でも舞台上に積極的にかかわらせてほしい」という発言が折に触れて出てきたからだ。ここに、狂言方にあるいはクラシック音楽の演奏家にこんなことをさせてよいのだろうか、などといったちっぽけな遠慮は吹き飛んだ。彼らがそれぞれの場で培ってきた伝統や型に安心して身をゆだね、そのうえで思い切り遊ばばいいんだ！

考えてみれば、狂言は下剋上盛んなりし室町時代の産物である。かたやモーツアルトのオペラも、フランス革命が勃発する時代に書かれた。つまりあらゆる価値転換が起こるなか、それに翻弄される人間模様を笑いに昇華させた両者は、じつのところ同じことなまでに重なり合う。ここに、オペラ本来の旋律をオーケストラの器楽アンサンブルが担当し、ストーリーは狂言師が台詞や所作で表現するという、まったくの新ジャンルが登場する運びとなった。

ちなみに「オペラ」とは元来「作品」という意味。「狂言風オペラ」とは、じつところモーツアルトのオペラに題材をとりつつも、オペラにつきものの人間の歌を敢えて排した、まったく新しい「狂言風作品」として、ジャンルの縦割り状況や洋の東西の違いに、飄々として風穴を開け続けている。

山中 みんなの同僚はもちろん、多くの文化人類学関係者も展覧会に行ってくれたみたいですが、彼らの感想としては、どうしても文化的な背景から脱文脈されているところ、研究家として報が切り落とされているところが、研究者としては抵抗があったという感想が少なくありませんでした。

齋藤 わたしもそういう話を聞きました。また、アイヌ文化の伝承活動をされている方々数名と一緒に行ったのですが、これどうやって作ったの？ 何で作られているの？ どんときどきに使うの？ というところの情報がなくともかしい、と言っておられました。実際にものづくりをする人や、似たようなものが身近にある人ほど、「美術館で展示を見ている」というのを忘れて、そのモノについて「知りたい！」と思うのでしょうか。

上羽 モノ+背景で文化情報を提供しないといけないという研究者の性みないなものを背負ってますよね。ただ、わたしの場合、新美術館ではいっそのことキャプションはなくても良いとさえ思っていました。今は美術館でも博物館でも、ついわたしたちはキャプションから見えてしまう。「西アフリカのどこどこで作られている仮面」という情報を見て安心して、モノを見た気にもなるし、わかった気になる。文字情報に依存しすぎる傾向があるように思っています。モノの本質を自分の目で見抜く力を養う展覧会があってもいいのではないのでしょうか。

山中 お客さんのなかには、「これほしい」とか「うちに持って帰りたい」とか、予備知識にとられない素直なりアクションをしている方も多かった。そういう意味で、他人の知識や評価にとられないで楽しめる展覧会だったのではないのでしょうか。長屋 美術館は権威付けをする機関なので、「名画」と位置づけられたものに対して異議を唱えにくいという雰囲気を感じているのはたしかです。でも今回の展示にはいわゆる美術館の美的基準とは違う基準が持ち込まれました。間口がとても広いので、お客さんが入り込みやすい。美術館が



エピソードに展示される品々への解釈は、観覧者にゆだねられている。国立新美術館にて(撮影・上野則宏)

という印象です。この展覧会の趣旨は「イメージの生成や享受に普遍性はあるのか」という問いかけでした。「ほしい」「怖い」「気持ち悪い」といった反応は、知識にとられないでイメージの力を感ずるからこその出でたものではと思うのですが、どうでしょう。

上羽 目の前にあるものに対して自分が感じたことを率直に言うということは今の人には避けていて、周りの人がいいと思っていなかったらすごく不安になるんだと思います。名の知れた作家の展覧会で、いわゆる「名画」を見てそれを「いい」と思わない」とは言いづらい雰囲気があるように思います。今回の展覧会には、そもそもほとんど知らない地域でまったく知らない人たちが作っているものだから、「かわいい」とか「いい」とか「気持ち悪い」とか言いやすかったのかも知れません。



「ビス」を見上げる。国立新美術館にて(撮影・吉田憲司)

知らず知らずのうちに与えている強制力を開放するひとつの機会になったかもしれない。

今回は、お客さんの層が普段に比べて幅広かったです。若い方から年配の方まで。お子さんの姿も多く、新美術館ではちょっと珍しいです。

山田 また、今回の展覧会では、面白さのポイントがいろいろあったのもよかったと思います。仮面の部屋に反応した人もいれば、約六メートルのインドネシアの葬送用の「ビス」のところで圧倒された方もいました。またわたしの身の回りの美術関係者のなかで反応が良かったのはエピソードの部屋ですね。展示されていたモノのサイズが大きかったのも展示空間に合っていてよかったですね。

### みんなくでのみどころ

山中 さて、同じ展覧会を九月からはみんなくでの特別展示館で開きますが、雰囲気はぜんぜん違うものになります。天井の高さも違うし、二階建てという構造ですし、面積も異なります。

みんなくでの開催のポイントには、すぐ近くに本館展示がある、ということ。イメージの力、展自体は通文化的なもの、つまりさまざまな文化のモノをテーマごとに混ぜている展覧会ですが、本館展示は地域ごとの展示です。特別展のお気に入りの展示物を見て、「これはどういう人たちが何のために作ったんだろう」という疑問を感じたときに、本館展示に行ってもっと深く知ることができます。たぶん特別展会場と本館展示を一日で全部見ようとしたら疲れ果ててしまうので、何度もいらしてほしいです！

### オーストリア

オーストリアで収集されたアルミ製の弁当箱で、四隅に小さなキノコ形の空気穴があいている。バターを塗った黒パンと、ゆで卵、ソーセージ、チーズなどを入れる。  
H 8.3 x W 20 x D 24  
H0067305



### ブータン

ブータンでよく使われている竹の弁当入れ籠で、現地名はバンチュー（ボンチュー）。  
H 10 x W 24 x D 24  
H0000290



### 台湾

台湾花蓮県のおそらく先住民族ブマンが使っていた籐製の弁当箱。  
H 16 x W 20 x D 7.7  
H0010620



### インド

近年大都市で弁当配達がおこなわれているが、弁当箱のデザインも次第に斬新なものがあらわれてきている。  
H 23 x W 14 x D 14  
H0276513



### エチオピア

エチオピア中央部アムハラの弁当容器。アガルグルとよばれる。インジェラ（テフという穀物を粉にして、水で溶いて発酵させ、うすくレープ状に焼いたもの）に、ワット（シチュー状のおかず）をかけたものを入れ、農作業の合間に食べる。  
H 15 x W 31 x D 22  
H0008658



### インド

インドでよく使われている4段重ねの弁当箱で、2段、3段のものもあるが、基本的な形は共通している。それぞれの段に、ご飯、カレー（1段または2段）、デザートなどを入れる。  
H 29 x W 12 x D 11  
H0099114



### 日本（石川県）

石川県で使用されていた弁当箱で、現地名はメシゴーリ。  
H 4.8 x W 16 x D 11  
H0016908



### 日本（沖縄県）

沖縄県那覇市で収集された弁当を入れる重箱。  
H 18 x W 12 x D 12  
H0005283



### タイ

タイ北部のものとして推定される竹編み、漆塗りの弁当箱。  
H 15 x W 15 x D 14  
H0005820



### タイ

形はインドと共通だが、側面にタイ風の装飾が施されているタイの弁当箱。  
H 35 x W 17 x D 15  
H0000396



### インドネシア

インドネシア、パタックで第二次世界大戦前に使用されていた竹筒の飯入れ。野外で仕事をする人が用いたもので、米やとうもろこし、副食などを入れる。キンマ用の材料入れにも用いていたと思われる。  
H 17 x W 11 x D 11  
H0009891



### フィリピン

フィリピン北部ルソン島ボントックの籐製の弁当容器。日常用で米や飯などを入れる。  
H 19 x W 28 x D 13  
H0008258



## 集めてみました世界の



すぎもと よしお  
杉本 良男 民博 民族文化研究部

最近インドの弁当箱（ランチボックス）を話題にした映画が日本でも相次いで公開された。日本の弁当や弁当箱の美しさにも、世界的な注目が集まっているようだ。そこでは弁当箱を通じた心のつながりが人びとの感動をよんでいる。民博が所蔵している世界の弁当箱を集めてみた。

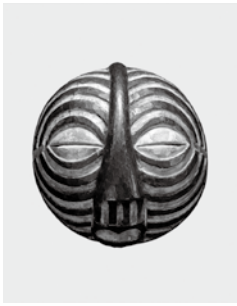
※寸法の単位はセンチメートルです。

特別展 国立民族学博物館創設40周年記念 日本文化人類学会50周年記念

「イメージの力」

国立民族学博物館コレクションにさぐる 人間の作り出したイメージのはたらきや受けとめられ方に、人類共通の普遍性があるのか否かをさぐります。

会期 9月11日(木)～12月9日(火) 会場 特別展示館



仮面「キフェベ」、民族／ルバ、国名／コンゴ民主共和国

■関連イベント

みんなくXMBBSラジオ presents 「角淳一が迫る！すみからすみまで「イメージの力」

テレビやラジオでおなじみの角淳一さんが吉田憲司(本館教授)とイメージの力に迫ります。司会は、アナウンサーの古川圭子さん。日時 9月14日(日)14時20分～15時40分(13時30分開場)

会場 本館講堂(定員450名) ※申込不要、先着順、参加無料

トークイベント「イメージの力」音楽、デザイン、小説の各界で活躍するゲストがそれぞれのイメージの力に迫ります(全3回)。日時 9月27日(土)13時30分～15時(開場12時30分)

第1回ゲスト UA(歌手) 聞き手 川瀬慈、齋藤玲子(本館助教) 会場 本館講堂(定員450名) ※申込不要、先着順、参加無料

みんなくナレッジキャピタル 「イメージの力」をさぐる

大阪・梅田のナレッジキャピタルで特別展と連続した連続講座を開催します。(全7回) 時間 19時～20時30分 会場 グランフロント大阪北館1F ナレッジキャピタルThe Lab CAFE Lab

9月12日(金) 講師 吉田憲司(本館教授) 話題 みえない力をあやつる 仮面・神像・装身具

9月24日(水) 講師 須藤健一(本館館長) 話題 みんなく40周年と「イメージの力」 ※参加費500円(ドリンク代)、定員各回50名 ※申込み・お問い合わせ 一般財団法人ナレッジキャピタル 電話 06・6372・6533

企画展

「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」

グリーンランドの自然、そこに住むイヌイットの人びとの歴史と文化を紹介します。会期 9月4日(木)～11月18日(火) 会場 本館企画展示場



「トゥピラク像」高門宮コレクション／赤坂友昭撮影

みんなくゼミナール

時間 13時30分～15時(13時開場)

会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)

第436回 9月20日(土)

「特別展関連 イメージの力——みんなくのコレクションが語るもの」

講師 吉田憲司(本館教授)



展覧風景 国立新美術館での「イメージの力」の展示

人類はその歴史のなかで、多様なイメージを生み出してきました。果たしてそうしたイメージの創りあげ方や受けとり方に人類に共通の普遍性があるのでしょうか。国立新美術館での展示を経て、みんなくで改めて開催される特別展「イメージの力」のなかで、その答えをさぐります。

第437回 10月18日(土)

「企画展関連 はるかなる北の大地、グリーンランドの自然と人びとの暮らし」

講師 岸上伸啓(本館教授)

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話をしよう

時間 14時30分～15時30分

会場 本館ナヒひろば

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が来館された皆様の前に登場します。「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

9月7日(日)

話者 岸上伸啓(本館教授)

話題 「企画展関連 グリーンランドの自然と文化」

9月28日(日)

話者 山中由里子(本館准教授)

話題 「特別展関連 絵解きの時」

■関連イベント

ワークショップ

「グリーンランドの想像トゥピラクを作ろう」 紙粘土と竹べらでトゥピラクをつくります。日時 9月7日(日) 13時30分～16時30分(13時受付開始)

会場 本館第3セミナー室(企画展示場) 講師 田主誠(版画家)、岸上伸啓(本館教授) ※要事前申込(先着順)、参加費500円(別途要展示観覧券)、小学1年生以上対象、定員15名

みんなくナレッジキャピタル 「高砂族」と向き合った日本人研究者 鹿野忠雄と馬淵東一

日時 9月13日(土)14時～16時 講師 宮岡真史子(福岡大学准教授) 話題 原住民族ツォウの社会と祭り

日時 9月23日(火)祝14時～16時 講師 野林厚志(本館教授) 話題 バイワン族工芸の伝統と今

会場 本館第5セミナー室(定員80名) ※申込不要、先着順、参加無料

「民族芸術学会創設30周年記念大会公開シンポジウム」

人間にとつてのイメージの働き、その重要性を、学問分野を超えて、さまざまな角度から検証します。日時 9月22日(月)13時30分～16時30分

会場 本館講堂(定員450名) 講師 小川勝(鳴門教育大学教授) 齋藤亜矢(中部学院大学准教授) 松本絵里子(神戸大学大学院准教授) 吉田憲司(本館教授) ※申込不要、先着順、参加無料

●展示ガイド更新のお知らせ

2014年3月に新しくなった東アジア展示の展示ガイド更新版が完成しました。展示ガイド(バインター形式)をお持ちの方には、無料で差し替え分をお渡しいたします。ミュージアム・ショップにお申し出ください。

●無料観覧日のお知らせ

9月13日(土)と9月15日(月・祝)は、本館展示と特別展を無料で観覧いただけます。ただし15日は、自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。

●南アジア・東南アジア展示リニューアルのお知らせ 展示リニューアル工事のため、南アジア・東南アジア展示場が11月6日(木)から3月18日(水)まで閉鎖されます。閉鎖前には是非ご来館ください。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。 ※電話でのお問い合わせ受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介 東賢太郎・市野澤潤平 木村周平・飯田卓 編 『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』 世界思想社 4,000円(税抜) 岸上伸啓 著 『イスピアット写真帳——パロー村の暮らし』 風土デザイン研究所 1,500円(税抜) リスクが技術・制度として浸透し、個人がリスク・コンシャスな主体として立ち上がる「リスク社会」。本書は、そのメカニズムを人類学の立場から批判的に考察し、オルタナティブを模索する新たな試みです。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716 http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室 定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第436回 10月4日(土)14時～15時

「特別展イメージの力」 国立民族学博物館コレクションにさぐる「関連」

アート(美術)と人類学のあいだ 特別展「イメージの力」によせて

講師 吉田憲司(本館教授)

アートと人類学(民族学)。20世紀を通じて、それぞれの道筋をたどってきたこのふたつの領域が、近年、急速に接近し、交流をもち始めています。国立新美術館と民博の共同で企画した今回の特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」も、アートとアーティファクト、美術館と博物館、美術史学と人類学の壁を越えた試みのひとつです。今回の展示にちなんで、アートと人類学の関係を改めて考えます。

※講演会終了後、講師の案内のもと1時間程度の特別展見学会を開催します。

東京講演会

会場 モンベル渋谷店5Fサロン 定員 60名(要事前申込)

※一般の方も参加可能です(参加費500円)

第110回 10月19日(日)14時～15時

多みんぞくの街・新大久保とハラルフード産業

講師 菅瀬晶子(本館助教)

日本有数の多みんぞくの街、東京都新宿区の新大久保。韓流の街と思われがちですが、じつは多種多様な移民が混住しています。本講演では、新大久保が多みんぞくの街となった歴史を振り返るとともに、近年もっとも活気のある「イスラーム通り」に注目します。イスラームの教えに沿った食べ物であるハラルフード産業は、この街でいかにして花開いたのでしょうか。当日は、新大久保で売られているハラルフードのサンプルを、実際に手に取っていただくこともできます。

※講演会終了後、講師をまじえた1時間程度の懇談会を開催します。

シンポジウム「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」

アバルトヘイトの廃止後、進行する国内の都市化に注目して、持続可能な資源利用や生き方について考えます。日時 10月11日(土) 10時40分～13時25分 映画会 14時15分～16時30分 講演会 会場 本館講堂(定員450名) ※申込不要、映画会は要展示観覧券

研究公演「りんけんバンドみんなく公演」

沖縄の新しい音楽をうみだしているりんけんバンドと小学生の演奏がコラボレーションしたステージです。日時 11月1日(土)13時～15時30分(開場12時30分)

会場 本館講堂(定員450名) 申込締切 10月14日(火) ※要事前申込、要展示観覧券

みんなく創設40周年記念「カレッジシアター「みんなくの地球探究紀行」

研究者が撮影した世界各地の記録映像と研究者によるレクチャー。お弁当付き。時間 11時～13時30分

会場 あべのハルカス近鉄本館「スペース」主催 産経新聞社

特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団 ※要事前申込(申込締切は各回開催日の1週間前)、参加費 各回3000円

9月10日(水) 三尾穂(本館准教授)

インドの女神にささげる歌と踊り

9月17日(水) 寺田吉孝(本館教授)

島々に響く青銅と竹の音——フィリピンの伝統音楽

9月24日(水) 川瀬慈(本館助教)

精霊と人のコミュニケーション、ザール憑依 儀礼(エチオピア)

お申込み・お問い合わせ ウェーブ産経カレッジシアター係

電話 06・6633・9087



BORDERLESS HERITAGE

# 文化遺産

## おもてうら

BORDERLESS HERITAGE

# 翻弄された地方劇

## 中国の秦腔

清水 拓野

神戸女学院大学非常勤講師

芸能のかたちは、時代とともにうつり変わってゆく。今回紹介するのは、中国政府が認めた文化遺産。しかし認定後も、かたちが固定されるわけではない。

### 革命とかかわってきた時代

中国の西北地域（陝西省や甘粛省など）には、秦腔という地方劇がある。この演劇は、今では国家レベルの無形文化遺産



秦腔の若手俳優による上演のようす。秦腔では最低限の小道具しか用いないで演じる

産認定を受けているが、かつては政治的思想を人民に伝達する手段として用いられるなど、これまで政治とかかわりながら複雑な歴史を歩んできた。とくに、

### 改革開放時代の苦難

中華人民共和国建国後は、俳優の政治意識や上演組織の体制や演目内容などに関する演劇改革が全国規模でおこなわれ、社会主義革命の推進のために、秦腔はより本格的に政治利用されるようになった。さらに、文化大革命期（一九六六～一九七六年）には、人民を政治的に啓発するための革命模範劇とよばれる演

在の若者のあいだで顕著にみられ、彼らはテレビやネットには興味を示しても、わざわざ劇場まで秦腔を観に行こうとはしなくなった。

こうした状況に直面して、秦腔劇団の公演収入も減少し、多くの劇団が経営不振に陥ってしまったのである。そして、ついには他の劇団と統廃合し、人員整理をおこなうようになった。例えば、秦腔がきわめて盛んな西安でも、市内の四つの秦腔劇団が、西安秦腔劇院として二〇〇七年六月に合併

統合された。その四つのなかには、西安易俗社という辛亥革命（一九一二年）のころから一〇〇年近くも存続してきた有名劇団まで含まれていたため、多くの者に衝撃を与えたのである。

### 無形文化遺産化によるあらたな展開

このように、近年の秦腔を取り巻く環境は厳しくなっているが、明るい変化の兆しもあらわれつつある。そのひとつの契機となったのが、秦腔が二〇〇六年に国家レベルの無形文化遺産

に登録されたことである。その背景には、改革開放政策による高度経済成長を経て自国文化に対する自信が強まり、かつての革命時代のように、中国政府が伝統文化を「封建的で、時代遅れの、近代化を阻害するもの」であるとはみなさなくなり、逆にそれを伝統的な価値を体現する貴重な文化遺産として再認識し始めた、という事情がある。さらに、ユネスコの無形文化遺産の保護条約にも影響を受けている。

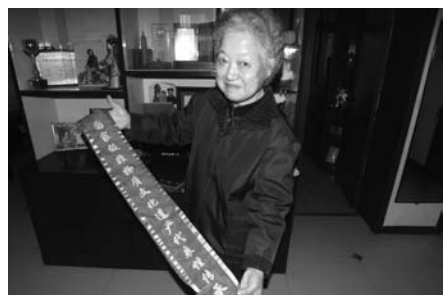
そして、こうした無形文化遺産

産化をきっかけに、秦腔の保護と保存をめぐる動きがさまざまな形で活発化してきているのである。まず、二〇〇九年五月には、秦腔の芸風を後世に伝えるために、政府が流派の伝承人を決めて秦腔の伝承活動を奨励するようになった。実績や芸歴に応じて、実際に何人かの名優が伝承人として選ばれ、弟子への教育活動もより積極的におこなうようになったのである。また、二〇〇九年九月には、政府の出資で陝西秦腔博物館が西安で開館した。これは、秦腔の歴史や

芸能の特徴などを幅広く紹介するために設立されたものである。興味深いことに、陝西省と同じく秦腔が盛んな甘粛省の蘭州にも秦腔博物館があり、陝西秦腔博物館と開館日を競うような形で設立された。秦腔の保護と保存をめぐる動きがそれだけ盛り上がっている、ということだろう。



陝西秦腔博物館の開館式のようす。多くのメディアがこのようすを取りあげた



余巧雲さん。秦腔の流派伝承人のひとりとして選ばれた女優



陝西秦腔博物館の展示。衣装や脚本から舞台装置の展示まである

かゝって、これまで秦腔は、時代に翻弄され、さまざまな苦難を経てきたが、無形文化遺産化したことによって注目度が上がり、人びとの保護と保存の意識も一層高まったようである。もちろん、芸能としてのバイタリティを保つためには、継承だけでなく、革新していくことも重要であり、それをどのように促進していくかが今後の課題であろう。とはいえ、継承の問題に目を向けられるほど、衰退の一途を辿っていた秦腔が復興しつつあるのは、大きな希望といえるだろう。



フェアトレードは運動であって、到達点ではない。生産者や労働者の生産や生活、あるいは意識に影響を与えたその先に何かがあるのか。南アフリカ、ルイボス茶生産の現場から紹介する。

## ルイボス茶の生まれ故郷

日本でも最近になって、ルイボス茶が知られるようになった。ルイボス茶は、ルイボスというマメ科植物の枝葉を発酵させたハーブ茶である。ルイボスは、南アフリカの西ケープ州と北ケープ州の一部だけで生育する。この地域の年間降水量は一五〇ミリ程度、夏の気温はときに四〇度におよぶが、冬には零度近くに下がる。こうした厳しい気候のため、年間を通じて荒涼とした景観がこの地域を覆っている。

ところが、いったん雨が降ると、この地域は花の絨毯を敷き詰めたかのように鮮やかな色彩に満ち、多数の観光客が訪れて、町は活気を帯びる。フラワー・ツーリズムが地域を支えているのである。だから、脆弱な生態系をしっかり守る必要がある。資源の持続的な利用が生態系管理上からも重要な課題となっている。

## 商品特性と寡占的な市場構造

ルイボス茶はカフェイン・フリーで抗酸化作用が支払って製品に加工するか、ルイボスを言い値で買い取ってもらうか選択せざるをえない。つまり、大規模農場に依存する枠組みから抜け出すことは難しいのである。

## ルイボス茶のフェアトレードとアイベルド協同組合

北ケープ州で、この状況を決定的に変えたのが二〇〇一年に設立されたアイベルド協同組合である。アイベルドは二〇〇一年に複数国の有機認証を、二〇〇三年にフェアトレード認証をそれぞれ取得した。また、二〇一〇年には有機とフェアトレードのダブル認証も取得している。

アイベルドが重視しているのは有機栽培であり、フェアトレードを始めたのはその販売先を確保するためである。というのは、ルイボス茶自身が寡占的に取引されているうえに、フェアトレードのルイボス茶の市場規模もまだ小さいという現実のもとで、貴重な生態系保全に役立つ有機農業を前面に打ち出しているからである。

もちろん、フェアトレードによる経済的成果も大きい。とくに、グループや地域社会の社会的発展や能力開発を目的とするフェアトレードの社会プレミアムなどの資金を利用してできた加工場によって、農民は大規模農場に依存しなくてもよくなった。この点で、フェアトレードの意義はとても大きい。

具体的な作業としては、まずルイボスを機械によって細かく裁断する。次に、この裁断されたルイボスをコンクリートの乾燥場に一二時間放置した後、二時間ごとに木製のレーキや長い棒で数回かき回す。この過程で、ルイボスは自然発酵して色が赤変する。

あり、健康によいという理由で世界的に人気が大してきている。だがその生産は、南ア資本のルイボス茶加工メーカーや、多国籍紅茶メーカーと契約関係にある、白人経営の大規模農場が大半を占めている。こうした農場のなかにはみずから加工場をもつて、二次加工をおこなうところもある。

市販・輸出されているルイボス茶の大半は少数の大手メーカーによる製品である。この寡占的な市場構造を補強しているのが、南ア・ルイボス茶評議会である。この評議会は大規模農場主、加工メーカー、小売関係者をメンバーとし、ルイボス茶の基準・規格を決めている。しかし、黒人や混血のアフリカ人系人が大半を占める小規模農民の要求はほとんど採用されないことがない。

このことは、ルイボスが育つ地域の農民たちにとってどういう意味をもつのだろうか。この地域では厳しい自然条件のために、食料作物の生産は難しい。だから、ルイボスを細々と生産するか、大規模農場の賃労働者として働くくらいしか生計手段がない。ルイボスも、大規模農場に高い料金を

乾燥したら袋詰めして保管する。殺菌と包装には専用の設備が必要なので、外部委託している。

アイベルドのルイボス茶は有機農業がセールスポイントである。だから、ルイボスの栽培だけでなく加工工程でも環境的な持続可能性を重視している。そのために機械に頼るのではなくたくさんの手作業を組み込んでいる。このこだわりは、有機農業（持続可能性）とフェアトレード（仕事の確保）の基本的な考え方を結びつけるものである。

## 高まる農民の自立意識

農民たちはフェアトレードによってどのように変わったのだろうか。ある村でおこなった調査から、いくつかの興味深い事実がわかった。まず、高齢女性がアイベルドでいろいろなポジションに就き、大きな社会的役割を果たしている。次に、NGOと一緒にする参加型調査によって、農民は環境や生態系に高い関心をもつようになった。さらに、組合の設立に始まって、有機農業やフェアトレードなど組合の方向性を主導してきたNGOから自立しようという志向性が大きくなっている。この点は、フェアトレードからの「卒業」を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。NGOとの協働といっても、現実には指示・服従という側面が避けられない。フェアトレードで力をつけた農民は、そのことを克服すべき課題として認識し始めている。それはフェアトレード本来の目的である、自分たちで物事を決めていく力の強化を意味している。こうした意識がみんまで共有されると、フェアトレードからの「卒業」が議論できるようになる。



メルクラール村の典型的住居



アイベルドのマネージャーたち

上：粉砕したルイボスを集める  
下：発酵したルイボスの粉末を  
攪拌（かくはん）する



上：ルイボスを刈取る  
下：ルイボスの枝を切断・粉砕する



雨が降ると花の絨毯に覆われるメルクラール村の大地

# 味の根っこ



西インドのストリート・フード

## ミサル

まつお みずほ 松尾 瑞穂 民博 先端人類科学研究部



ミサルのセット。パンを浸して食べる。奥にはトッピング用の玉ねぎ。左下は好みで加える激辛のソース。ヨーグルトドリンクも一緒に（提供・ナチケットベンセ）

### 「男」の食べ物

地域差が大きいインドには、「インド料理」と一言ではくることができないほど多様な文化がある。それは、主食やカレーにとどまらず、スナックと総称される軽食も同様であり、その土地でしか味わうことのできないローカル・フードが各地に存在する。

西インド、マハーラーシュトラ州のミサルという軽食は、そうしたローカル・フードのひとつである。現地語のマラーティー語で「混ぜたもの」という意味のとおり、マトキ(モスビーン)やじゃがいもなどの野菜を香辛料とともに煮込んで混ぜ合わせたペースト状のもので、うえに生玉ねぎとコリアンダーのみじん切り、ファルサンやセーヴとよばれる揚げたチップスをかけ、食パンか丸パンと一緒に食べる。家庭で作られる「おふくろの味」というよりは、どちらかといえば下町の屋台や村の食堂で、お腹を空かした若者や労働者が食べるのにふさわしい、庶民的なB級グルメである。わたしがはじめてミサルを食べたのも、調査村にある食堂で、わたし一人だけ女性という状況で少し肩身の狭い思いをしながらだった。食にもジェンダー・イメージがあるとすれば、ミサルはまさしく「男」の食べ物だといえるだろう。

### ミサルの本場

ミサルはマハーラーシュトラ州全土で食べられているが、その本場といえ、なんといつてデカン高原の西端に位置するブネーという都市である。この町は、マラーター王国が内部分裂したのを機に実権を握った宰相が、実質的な王国の首都として治めた古都である。司祭階級にあたるバラモン・カースト出身の宰相は、行政官として同じバラモンを各地からブネーへ呼び寄せた。そのため、マラーターが人口の三、四割を占めるマハーラーシュトラ州のなかで、ブネーは例外的にバラモンが集住し、菜食主義のような食文化が色濃く残る町である。料理も、粗糖を隠し味に使った甘めの味付けが特徴だ。そんなブネーのミサルは、コルハールミサルほど辛くはない比較的マイルドな味わいで、家族連れにも好まれている。わざわざ「ブネーリー(ブネー風)ミサル」と名付け、コルハールミサルとの差別化がはかられているようだが、こぎれいな食堂やカフェで食べられるところも増え、ミサルのイメージの刷新に一役買っている。

### ライバル都市のマイルドなミサル

さて、そんなミサルの本場コルハールに対して、近年「ミサルセンター」の異名をとるのが、



村の食堂のメニュー表。ミサルは左列の上から4番目。15ルピー（約30円）

マラーターとバラモンは、ともに上位カーストとしてこの地域の支配集団を形成し、歴史的にライバル関係にあった。だが、両者の競い合いが、政治的葛藤ではなく、ミサルのバラエティの拡大へと進むのならば大歓迎だ。それぞれの町の特徴を生かして展開するローカルフードは、地域アイデンティティを醸成するとともに、B級グルメの食べくらべというあらたな楽しみをインドに生み出しているのかもしれない。



ミサルを食べながらおしゃべりに興じるひととき

### 基本的なミサルの作り方 (3~4人分)

じゃがいも 1個、モスビーン 2カップ、にんにく 2かけ、しょうが 1かけ、タマリンド 1個、マスタードシード 小さじ1、クミンシード 小さじ1

ターメリック粉 小さじ半分、赤唐辛子粉 小さじ1、コリアンダー粉 小さじ1、ガラムマサラ 小さじ1.5

油 小さじ3、塩 少々

トッピング：生のコリアンダー、玉ねぎ 半分、トマト 1個、ファルサン or セーヴ (適量)、ライム or レモン 半分

※モスビーンは緑豆でも代用可。ファルサンやセーヴやタマリンドは、インド食材店で手に入る。

- ① じゃがいもを茹で、つぶす。にんにくとしょうがをおろす。
- ② 圧力鍋に水でゆすいだモスビーン、茹でてつぶしたじゃがいも、ターメリック粉半分、塩、モスビーンが完全に浸るくらいの水をいれて加熱し、2、3回蒸気があがるまで加圧する。火から降ろし、圧が下がるまでしばらくそのまま置いておく。
- ③ タマリンドを半カップの水に20~30分つけて戻しておく。
- ④ フライパンに油を熱し、マスタードシードを熱する。パチパチと音が鳴ったら、クミンシードとみじん切りした玉ねぎを加えて炒める。
- ⑤ 玉ねぎがしんなりし色が変わったら、にんにくとしょうがを加え炒める。
- ⑥ 残りのターメリック粉、コリアンダー粉、赤唐辛子粉、マサラを入れて炒める。
- ⑦ 圧力鍋の材料をすべて入れて混ぜあわせ、タマリンドの汁を加え炒める。
- ⑧ 8~10分ほどかき混ぜながらよく炒め、水分が足りなければ1カップの水を加える。
- ⑨ トッピング用のコリアンダー、玉ねぎ、トマトを大きめのみじん切りにする。
- ⑩ 塩で味を調べ、好みでトッピングとライムの絞り汁をかける。パンと一緒にどうぞ。

も州の南部に位置するコルハールという町である。単なるミサルではなく、わざわざ「コルハール(コルハール風)ミサル」と銘打つ店も多い。  
コルハールは、一七世紀にデカンに登場したシヴァージー・ボンズレーが建国したマラーター王国の王家の拠点となった都である。戦士であったマラーターの人びとは肉(ノン・ヴェジ)料理と唐辛子を多用した辛い食べ物を好むとされており、なかでもコルハール料理は、マハーラーシュトラ州のなかでもかなりの激辛で有名だ。マトンやチキンをたっぷり香辛料

インクルーシブデザインは、ロンドンにあるデザインに関する学術機関として著名な英国王立芸術大学（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、以下RCA）の名誉教授ロジャー・コールマン氏が一九九四年に提唱をはじめたことばである。

まずは成り立ちを見てみよう。インクルーシブデザインと類似することばとしてユニバーサルデザインがある。これはアメリカのノースカロライナ州立大学にあるセクター・フォー・ユニバーサルデザインのロン・メイス博士が提唱したことで、日本でも二〇〇〇年ごろから民間企業の商品や公共のサービスを通じて普及した。ユニバーサルデザインが、アメリカの公民権運動の流れから不公平なアクセシビリティ（利用のしやすさ）の解決をうたっているのに対し、ヨーロッパ発のインクルーシブデザインは、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）の視点が中心にある。つまり、インクルーシブデザインは、「これまで除外されてきた人びとを包摂し、かつビジネスとして成り立つデザイン」と定義されており、社会的排除の解決に重点がある。

排除は、RCAインクルーシブデザイン研究拠点ヘレン・ハムリン・センター・フォー・デザインの客員特別研究員ジュリア・カセム氏によると大きく六つに分類される。それら

# インクルーシブデザイン Inclusive Design

みんなが  
うらやむ  
人間学の  
キーワード

ひらい やすゆき 九州大学大学院准教授  
平井 康之

は、社会的な解決が身体的な障がいに対応できていない「身体的排除」、視覚や聴覚などの「感覚的排除」、外国でその国のことばを理解できないなどの「知覚的排除」、ITに関する知識の違いからくる「デジタル化による排除」、社会からの疎外感のような「感情的排除」、そして貧困などの「経済的排除」の六つで、「感情的排除」が一番難しいと述べている。

「感情的排除」について、興味深いエピソードがある。ロジャー・コールマン氏の友人に車椅子で生活をしているキャサリンという女性がいた。彼女は住んでいるマンションのキッチンのデザインを彼に依頼した。彼は、下肢の邪魔にならないキャビネットや車椅子使用者に見合うカウンターの高さなどを考えていたが、彼女の口から出たのは意外にも「ご近所さんが羨むデザインにしてほしい」というリクエストであった。この話は、誰でもが他の人びとと同じように楽しめるデザインや、不安やストレスを感じなくて済む「感情的排除」の解決をよくあらわしている。

インクルーシブデザインは最近ようやく日本でも理解が広がってきた。ユニバーサルミュージアムにも関連の深い内容であり、今後博物館での取り組みも増えていくことが予想される。機能的な解決のみを考えがちであるが、「感情的排除」も解決するインクルーシブなデザインが望まれる。

# 新時代のタブラ

ディアナ・ニコディノブスカ 民博 外来研究員

タブラもつてる？

よく覚えているが、わたしは二三歳のころからタブラにはまっていた。家族や友人と夏、故郷のマケドニアで休暇に行くときはいつもタブラを携え、

夜更けまで何時間もサイコロを転がしていた。出た目によってそれぞれのもち駒(石)を移動させていくだけなのだが、簡単そうに見えてやってみると奥が深い。タブラ趣味はいまも続いていて、外国にいたるときも、この楽しさを満足させてくれる相手を探している気がする。今回の京都での滞在も例にもれず、外国から来た人にときどき「タブラもつてる？」と尋ねている。友人をつくって故郷にいるような気分には最高級の手段で、実際、トルコ人のハサンにこの質問をして以来、一か月に二回は公園のベンチなどでタブラをやっている。

ルーツは古代メソポタミア

タブラは、広く「バックギャモン」として知られるボードゲームの一種で、古くはメソポタミアといわれたイラクのあたりに起源があるらしい。考古学の研究ではすでに紀元前三〇〇〇年も昔からあり、



それぞれが箱に入れたサイコロを振る。左側が筆者

碁やチェスとともに世界最古のボードゲームともいわれている。特に古代ローマでは大変人気だったらしく、ローマ語で「盤」を意味する「タブラ」がそのままマケドニア語名にもなっている。今日もとても盛んなヨーロッパの地域といえはトルコ、ギリシア、マケドニアとブルガリアだ。

## 安らぎの源

チェスと違って、タブラは複雑な戦略もいらぬし、サイコロが決め手の、運に左右されるゲームである。そのため、これらの国ではチェスやほかのゲームよりはるかに普及している。誰でもできるといふ簡単さのおかげで何世代も楽しんできた人びとには、最高の安らぎの源だ。各国内に普及したのはもちろんだが、いまでは移民の流れとともに広がってなかった地域や文化にまで広がりがつつある。ベルリンなどのヨーロッパの都市でも、カフェや公園のベンチで目にするのは珍しくない。ひよっとするとその人たちの母語は違うのかもしれない。しかしタブラを知っていれば、それだけでつきあい始めるには十分なのだ。



## 宇宙服——宇宙飛行士の制服

和田 理男わだ りお 独立行政法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 有人宇宙ミッション本部有人宇宙技術センター開発員

人類が月面にあの小さな一歩をしるした瞬間を、テレビという新しい魔法の箱が、世界に知らしめて以来、イメージはできあがっている。衣服でありながら生命維持機能を有する、あの制服の進化形とは！



### 人類初の宇宙服

宇宙服とは、広義には宇宙飛行士の服装一般であるが、ふつうは宇宙飛行士が宇宙船外(宇宙空間)で活動をおこなう際に着用する服をさす。そのおもな機能は、気密性、気圧の確保、動きやすさ、温度調整機能、生命維持機能(酸素供給、二酸化炭素・有毒ガス除去)、有害紫外線の遮蔽などである。

人類初の宇宙服は、一九六五年三月、旧ソ連のアレクセイ・レオーノフ宇宙飛行士がおこなった二二分間の船外活動で使われた。当時の宇宙服は高々度を飛行する航空機パイロット用の与圧服を改良したものであったため、超高真空の宇宙空間では風船のように膨張して体を満足に動かすことができなかった。

一方、米国は旧ソ連に遅れること約三か月、一九六五年六月にエドワード・ホワイト宇宙飛行士が米国初の船外活動をおこなった。

冷戦期の宇宙開発競争として、初の人工衛星(スプートニク)と初の有人宇宙飛行(ユーリ・ガガーリン)は旧ソ連に軍配が上がったことは有名な通りである。

現在国際宇宙ステーション(ISS)で使用されている宇宙服は、生命維持装置により約七〜九時間程度の連続作業が可能である。

一方、宇宙服の膨張を抑えるために内部の気圧が〇・三気圧(エベレスト山頂程度)に調整されており、一気圧のISSから宇宙服を着用して船外へ出るには減圧症予防のために脱酸素作業が必要となる。この作業は、体内に溶けた窒素を体外へ排出するために純酸素吸引や運動をおこなうながら船内の気圧を徐々に下げるものであり、二・五〜一二時間を要するという課題がある。

### 月、小惑星、火星に向けて

各国の宇宙機関は、国際協働の有人宇宙探査として次に目指す目標を月、小惑星、火星としている。これらの新境地を開拓するには現在の宇宙服

名だが、宇宙服についても旧ソ連が米国に先立って成功を収めていることになる。

### アポロ計画以降の進化

米国の宇宙服は、一九七二年まで進められたアポロ計画によって大きく進化した(アポロ計画の予算は約二五〇億ドル、現在の価値では三三〇億ドル相当、当時の日本の国家予算を大幅に上回る大プロジェクトであった)。アポロ宇宙服の特徴は、重力があり岩石や細かい砂で覆われている月面で使用可能、生命維持装置が備わっていて五時間程度の単独活動が可能、地球と月との往還時に宇宙船内で使用する与圧服としても使用可能である。



人類初の船外活動(旧ソ連、アレクセイ・レオーノフ宇宙飛行士) ©RIA Novosti.

宇宙服では不十分で、宇宙服自体の軽量化や長寿命化をはじめ、鋭利岩石、細かい砂、厳しい温度環境などに対応しなければならない。

各国が将来の宇宙服について積極的に検討を進めるなか、JAXAでも次世代先端宇宙服の研究を進めている。JAXAの宇宙服の一番のポイントは、動きやすさを確保しながら内部の気圧を約〇・六気圧(富士山山頂程度)に高めて、前述した脱酸素作業を抜本的になくそうというものである。

宇宙服は、人類の活動領域を広げるうえで必要不可欠である。宇宙空間という過酷な環境で身体を保護し、自在な活動を提供するからである。近い将来、宇宙飛行士が月、小惑星、火星へ挑戦するときに向けてますます進化する宇宙服を見守っていただきたい。



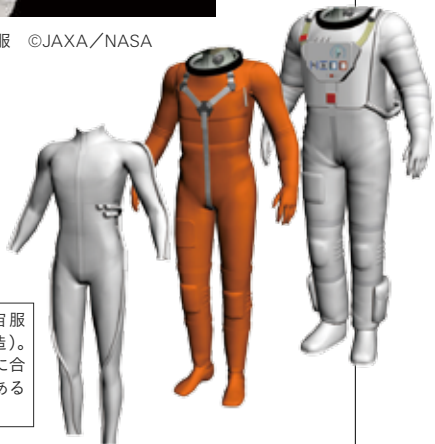
アポロ宇宙服(船外活動時の使用) ©NASA



アポロ宇宙服(船内での与圧服としての使用) ©NASA



ISSで使用されている宇宙服 ©JAXA/NASA



JAXA 次世代先端宇宙服のコンセプト(3層構造)。宇宙服は目的地の環境に合わせて開発する必要がある ©JAXA

大阪万博の際にアメリカ館で展示されていたアポロ宇宙服。現在は民博に収蔵されている

## 編集後記

本号の表紙に使ったメキシコの「生命の樹」。アダムとイヴがへびにそそのかされて禁断の果実を食べる、という聖書の場面をかたどった粘土細工である。ショッキングピンクの幹や枝に色とりどりの動物や花が鈴なりにになっている。なんともにぎにぎしいエデンの園で、私のお気に入りの一点である。ワケあって新美術館での「イメージの力」展では展示ができなかったのであるが、みんぱくで開催される特別展でめでたく復活した。

「イメージの力」展は、このような資料も宗教や儀礼などの文脈からいったん切り離して、直感的に何かを感じ取ってほしい、という意図で企画された。結果、これまで同じ展示空間に並ぶ機会がなかった、さまざまな背景の収蔵品がまさに「協演」する展覧会となった。これらのモノに宿った「つくも神」たちは、言葉も作法も違うだろうが、万国百鬼夜行とでもいうべき宴を每晚開いて盛り上がるのかもしれない……。などと妄想するのも楽しい。

(山中由里子)

## みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、「月刊みんぱく」や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00~17:00)

●表紙：生命の樹 標本番号 H0153925  
地域：メキシコ 民族：メスティン

## 次号の予告

特集

## 未知なる大地 グリーンランド

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

## 月刊みんぱく 2014年9月号

第38巻第9号通巻第444号 2014年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子(編集長) 櫻永真佐夫 河合洋尚  
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 丸川雄三  
編集アドバイザー 山内直樹  
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

